

ブラジル・ポルトガル語を母語とする日本語学習者の結果残存の テイルの使用傾向—一定冠詞と不定冠詞による影響

How Brazilian-Portuguese Speakers Learning Japanese Recognize and Produce the Japanese Resultative *teiru*: A Study From the Perspective of the Influence of (In)definite Articles

TOFFOLI Julia

要旨

日本語で「結果残存のテイル」とブラジル・ポルトガル語（以下 BP）の「estar+過去分詞」は基本的に対応する。そのため、「結果残存のテイル」は比較的に習得が困難ではないと思われるが、日本語母語話者が「結果残存のテイル」を使用しているのに対して、BP を母語とする日本語学習者（以下 BPS）が「ある／いる」を使用している場合がある。これは BP における定冠詞と不定冠詞の影響だと思われる。それを確認するため本研究では BPS を対象とし、習得上の問題があるとされている「結果残存のテイル」の習得困難の原因を考察し、アンケート調査と文法性判断調査を通して、その特徴を提示した。その結果、不定冠詞がつく場面では「ある」の使用、定冠詞がつく場面ではタ形の使用が見られた。これらは BP における冠詞の影響だと思われる。

キーワード： ブラジル・ポルトガル語、結果残存のテイル、冠詞、母語の影響

1. はじめに

これまでの先行研究でテイルの習得に関するものは多く、「進行中」と「結果残存」の 2 用法のうち後者は習得が困難だとされている（黒野 1995）が、ブラジル・ポルトガル語（以下 BP）を母語とする日本語学習者（以下 BPS）のテイルの習得状況を扱った研究はない。

本研究は BPS を対象として、習得が困難とされている「結果残存のテイル」の習得上の困難点を考察し、その特徴を提示することを目的とする。

2. 先行研究

陳（2009）は、日本語母語話者（以下 NS）と中国語を母語とする日本語学習者（以下 CS）の「結果残存のテイル」と「ある・いる」の使用傾向の違いに注目し、どのような種類の「結果残存のテイル」が「ある・いる」との使い分けで問題になるのかを調査を通して提示した。その結果、両者の使用傾向は一致しているところがあるが、「移動」を表す動詞を使用する場面では不一致が見られ、CS にとって「移動」を表す動詞の「結果残存のテイル」は、「変化の結果の持続」というより、むしろ「存在」のほうに近い。そのため、「移動」を表す動詞の「結果残存のテイル」が非用となる可能性があることが分かる。

陳（2009）を踏まえた上で、庵（2010）は「結果残存」に二つの種類があると述べてい

る。一つは、例えば「財布が落ちている」のテイルは財布が落ちた結果、財布は道に「存在」することになるという意味を表している。それに対して、「電気がついている」のようなテイルの使用にはそのような関係は見られないという。そのため、前者のタイプは「存在形」、後者のタイプは「非存在形」と呼ばれている。その2種類の定義により、CSのイメージの中では、ある場合においてはテイル形とタ形が、ある場合においてはテイル形と「ある・いる」が類義表現になる。それにもかかわらず、これまで日本語教育で結果残存のテイル形と類義表現とされているのはテアル形のみである。こうした現在の枠組みは「学習者の日本語」の観点から見直す必要があると指摘している。

稲垣 (2013) は庵 (2010) で述べられているテイルの二面性 (存在形と非存在形) に基づき、中国語の対応表現と非存在形のテイル形を比較し、中国語において変化と結果の状態の両方を表せる場合は習得されやすいのに対して、変化しか表せない場合はCSがタ形を使う傾向があり、また、存在形のテイルとの比較により、中国語では (位置) 変化とその結果の状態 (存在) の両方を同時に表すことができないため、存在のみ表す場合では「ある・いる」を使用する傾向が見られることを指摘している。これらのことから、CSにとって「結果残存のテイル」が難しい理由は母語の影響であるが、なぜ習熟度が上がっても習得されにくいのかを考える必要があることも指摘している。

3. 結果残存のテイルに対応するBPの文法形式

日本語の結果残存のテイル形式に対して、BPではestar[presente]+participio (estar (現在形) +過去分詞: 以下PT) がよく用いられる。

(1) A janela está aberta (窓が開いている)

定冠詞 窓 be open:PT

BPには、日本語における主体変化動詞のような動詞の分類はないが、(1)の形式は、変化後の結果の継続を表すため、変化の概念を含まない動詞とは用いられにくい (儀保 2014)。さらに、結果残存を表す形式「estar+動詞 (過去分詞)」の「estar」という動詞には二つの主な用法があり、その一つは、動くことのできる、あるいは動かすことのできる生き物・物などの一時的な存在を表す場合に用いられる (彌永 2011)。

(2) O gato está em cima do telhado. (猫は屋根の上にいる)

定冠詞 ねこ be 上 の 屋根

このように、日本語で「結果残存のテイル」とBPの「estar+過去分詞」は基本的に対応する。そのため、「結果残存のテイル」は比較的に習得が困難ではないと思われるが、例外もあり、産出しにくい場合もあると予想される。

陳 (2009) で指摘されているように、CSはNSが移動を表す動詞のテイルを使う場面で「ある/いる」を使う傾向があり、CSにとって移動を表す動詞の「結果残存のテイル」は「変化の結果の持続」というより「存在」に近い。BPSについても、筆者の教育現場の経

験では同様の「結果残存のテイル」の誤用や非用が見られる。そこで、本研究では BPS の「結果残存のテイル」の使用傾向と、どのような種類の「結果残存のテイル」が「ある・いる」との使い分けで問題になるのかを予備調査と本調査を通して検討した。

4. 学習者の「結果残存のテイル」の使用傾向の仮説

BP の観点から分析した「結果残存のテイル」に、日本語教育の現場で見てきた学習者の使用傾向を加え、BPS の「結果残存のテイル」の使用における「テイル」の非用は BP による定冠詞・不定冠詞の影響であると仮定する。

BPS は「財布が落ちている」より、「財布がある」と言いがちである。それは、CS と重なる現象で、動詞によって「結果残存のテイル」は「変化の結果の持続」よりも、「存在」に近いので、「テイル」を使う必要性を感じないであろう (cf. 陳 2009)。特に、BP の場合は不定冠詞を用いる文であれば、存在を表す「estar」ではなく、日本語の「ある」に当たる「ter」が使われるため、「テイル」より「ある」にしてしまうと思われる。なお、「ter」を使うと、場所も表さなければならぬため、「状態」より「存在」の感覚がより強くなる。

(3) あそこに財布が落ちている (Tem uma carteira caída ali.)

ある 不定冠詞 財布 fall-PT あそこ

(4) あそこに財布がある (Tem uma carteira ali.)

ある 不定冠詞 財布 あそこ

定冠詞を用いる文でも、動詞によっては動詞を表す過去分詞の「結果残存のテイル」を省略しても、「ある・いる」だけで表現したいことが十分伝わる。

(5) 財布はあそこに落ちている (A carteira está caída ali.)

定冠詞 財布 be fall-PT あそこ

(6) 財布はあそこにある (A carteira está ali.)

定冠詞 財布 be あそこ

5. 調査

BPS にとって、「結果残存のテイル」は、動詞によっては「変化の結果の持続」よりも「存在」に近い意味である。そのため、BPS は「結果残存」にテイルを使う必要性を感じない場合があることが考えられる。そこで、初級で扱われている動詞¹を内省によって分析し²、テイルが非用となることが予想される動詞を以下のように抽出した (表 1)。

¹ 「初級の動詞」は旧日本語能力試験 N4 以下の動詞を指す。

² 動詞の分析は庵ほか (2000:96-105) で取り上げられている動詞の中、初級で扱われている動詞について、テイルをつけた場合に「結果残存」の意味を持つ動詞を取り、それぞれに例文を作り BP 訳をつけ、訳により①「estar+過去分詞」に当てはまる動詞 ②定冠詞・不定冠詞の使用における誤用を招く動詞 ③不規則動詞に分類し、BPS に場面をイメージしやすい動詞を選んだ。

表1 - テイルが非用となることが予想される動詞

定冠詞の場合：定冠詞を用いる文では、「ある・いる」だけで十分。 例：ハンカチはあそこに落ちているよ O seu lenço está (caído) ali ó. <small>定冠詞+あなたのハンカチ be (fall-PT) あそこよ</small>
動詞：集まる、掛かる、落ちる、止まる、空く
不定冠詞の場合：不定冠詞を用いる文では、物事の場所を指さなければいけないため「ある・いる」だけで十分。 例：うちの前に車が止まっている。 Tem um carro (parado) na frente de casa. <small>ある 不定冠詞 車 (stop-PT) 前 の うち</small>
動詞：集まる、掛かる、落ちる、止まる、空く、こぼれる

BPS においてどのような種類の「結果残存のテイル」が「ある・いる」との使い分けで問題になるのかを予備調査と本調査を通して検討した。

5.1 予備調査

5.1.1 予備調査の概要

調査は2015年8月に実施した。NS 35名とブラジル（サンパウロ）のある一般人向けの日本語学校のBPS71名（日本語能力試験N4レベル以上：N1 - 7名、N2 - 7名、N3 - 20名、N4 - 37名、以下N1、N2、N3、N4）を対象として、提示した場面に発話を記入してもらった。母語でどのように考えているのかが分かるように、同じ問題を日本語だけでなく、BPでも（別の質問紙で）答えてもらった。また、カウンターバランスを取るために、BPで書かれている質問紙（以下BP版）を行ってから、日本語で書かれている質問紙（以下日本語版）を行う組と日本語版を行ってからBP版を行う組に分けて行った。

予備調査アンケートでは、陳（2009）の調査をモデルにし、以下の4つのグループ（以下G）を作り、それぞれに発話を記入する問題を設定した。

G I - NSもBPSも「ある・いる」を使用する場面（3場面）

G II - NSもBPSも「結果残存のテイル」を使用する場面（3場面）

G III - NSが「結果残存のテイル」を使用しているのに対して、BPSが「ある・いる」を使用する場面 - 定冠詞の問題（4場面）

G IV - NSが「結果残存のテイル」を使用しているのに対して、BPSが「ある・いる」を使用する場面 - 不定冠詞の問題（5場面）

図1は実際に使用した項目の一例である。

- ① O seu amigo está procurando alguma coisa...
 友だち：あれ…私のハンカチ見た？
 あなた：あっ！（você aponta para o chão）あそこに_____

図1 - 予備調査で使われた問題の例

5.1.2 予備調査の結果と考察

G I と II では NS も BPS も同様に、それぞれの場面で「ある・いる」または「テイル」を使用する傾向があることが確認できた。それは、G I では、陳 (2009) でも述べられているように、「具体物の存在」の感覚が強いため、「ある・いる/ter」を用い、G II では「ドアが開いている」、「電気がついている」のような文では「ドア」、「電気」の有無は問題ではなく、それらの状態が問題であり、日本語では「結果残存のテイル」、BP では「estar+過去分詞」を用いるのが自然であるからだと考えられる。したがって、NS と BPS の「テイル・estar+過去分詞」の使用は対応していると言えるであろう。

G III では、場面によって違う傾向が見られた。「落ちる」を用いた場面では「ある」の使用の割合が圧倒的に高かった。同じように、G IV の場面でも「テイル」より「ある」の使用の割合が高かった。この結果から「落ちる+テイル」は「変化の結果の持続」より、「存在」に近い意味があり、BPS にとっては「テイル」を使う必要性を感じないと考えられる。

「集まる」「止まる」を用いた場面では「ある」の使用もあったが、「テイル」のほうが多かった。要するに、この結果から問題は定冠詞ではなく、「落ちる」という動詞に対する感覚が存在に近いと考えられるだろう。

「空く」を用いた場面では、定冠詞の場面でも、不定冠詞の場面でも「(席が) ある」より「テイル」が多く使用されている。しかし、「ある」と「誰もいない」を「存在」の一つのカテゴリーとして考えれば、使用の割合は「テイル」とほぼ同じになる。この結果から「空く+テイル」と「ある・誰がいる」はどちらも同様の使用傾向があり、類義表現として考えられる。ただし、BPS にとっては場面によって冠詞が変わり、その冠詞の使用の影響によって「テイル」が言いやすい場面と、「ある・いる」が言いやすい場面があると考えられる。それに対して、NS の結果はほぼ 100% 「テイル」となっており、NS にとっては「空いている」は存在ではなく、状態を表しているということが分かった。

G IV は、「死ぬ」を用いた場面では「死んでいる」より、「死んだ」、つまり、動詞の過去形の使用傾向が見られた。「死んだ犬がある・いる」という表現使用は少なかったが、興味深い。BP 版の回答を見ると“*Tem um cachorro morto*”（「死んでいる犬がある・いる」）と書いた人もおり、BPS にとっては自然な言い方であり、存在の感覚が強いと考えられる。

「止まる」を用いた場面では、G III における「止まる」の場面の結果と異なり、「テイル」ではなく、「ある」の使用が多かった。また、「止まった車がある」の使用もあった。この結果から、「止まる」の場合、不定冠詞を用いる文だと、状態より、存在を表すと考えられる。最後に「こぼれる」を用いた場面では、BP では「こぼれている」という言い方をあまりしないため、BPS は「ある」の使用のほうが自然だと感じるだろう。

5.2 本調査

予備調査ではBPSの「結果残存のテイル」の使用傾向が見えてきたと思われるが、結果からより多くのデータを収集する必要があると考えられ、特に上級者のデータも重要であることが明らかになった。また、定冠詞・不定冠詞と「ある・いる」との関係が見られたが、指示が分かりにくい問題があったため、新しいアンケートを作成し、本調査を実施した。

5.2.1 本調査の概要

予備調査の分析を踏まえた上で、2016年9月に本調査を実施した。NS 30名とブラジル（サンパウロ）のある一般人向けの日本語学校の学習者、そしてサンパウロ大学とブラジリア大学在学中の学部生を合わせ、96名（N1 - 18名、N2 - 20名、N3 - 26名、N4 - 32名）を対象として、予備調査の4つのグループを利用した文法性判断のアンケートに答えてもらった。BPSが母語でどのように考えているのかが分かるように、1つの問題について、設問を日本語で書いたものと、BPで書いたものの2種類を準備し、答えてもらった。また、カウンターバランスを取るために、予備調査と同じようにBP版を行ってから、日本語版を行う組と日本語版を行ってからBP版を行う組に分けて行った。

本調査では稲垣（2010）の調査をモデルにし、文法性判断タスクを用いてデータを収集した。予備調査を再確認するため本調査のGIIIとIVでも同じ動詞を用い、「ペン（定）が落ちる・財布（不定）」「コンサートに行く人（定）・人（不定）が集まる」「田中さんの車（定）・知らない車（不定）が止まる」「いつも座る教室の席（定）・バスの席（不定）が空く」を用いた場面を提示した。各問題に、「テイル、テアル、タ、ある、テイルNがある」の形態別の問いがあり（以下S）、調査協力者には各文が問題文を完成する文としてどの程度自然であるかを判断するよう指示した。S1~5は順番に「S1:テイル、S2:テアル、S3:タ、S4:ある、S5:テイルNがある」を指している。図2は実際に使用した項目の一例である。

① Você está andando na rua com o seu amigo. Ao olhar para frente...

Você: 「あっ! _____。」

	不自然		自然	
S1. さいふが落ちている	1	2	3	4
S2. さいふが落としてある	1	2	3	4
S3. さいふが落ちた	1	2	3	4
S4. さいふがある	1	2	3	4

図2 - 本調査で使われた問題の例

調査では4問のダミー問題を含めて18問を提供し、日本語とBPで自然か不自然なのかを判断してもらった。全問題の平均値の差、問題別の平均値の差を分散分析により検討した。最後に、NSは同じ場面に対してどのように思うのか比較するため、NS30名に同じ文法性判断アンケートに答えてもらい、N1からN4と合わせて5水準で分散分析を行った。

5.2.2 本調査の結果と考察

予備調査では BPS と NS の「テイル」と「ある・いる」の使用が一致しているところと異なっているところが見えた。本調査では BPS の使用傾向だけでなく、どの言い方が自然なのか、つまり、学習者の語感を確認し、結果によって母語の影響があるかどうか、また、あるとしたらどのように影響するのかを検討した。GI~IV、それぞれの場面を通し、全問題の平均値の差、そして、問題別の平均値の差を分散分析により検討した。

GI と II では各グループの全問題の平均値の差、各問題の平均値の差、そして、両グループを合算した平均の差を分散分析により検討した。その結果、BPS と NS の「テイル」と「ある・いる」の使用傾向が一致していることが確認できた。また、BP 版の結果から、GI では「ある・いる」、GII では「テイル」の使用が最も自然で、このグループで提示された「存在」になる場面と「状態」になる場面が日本語と対応していることも明らかになった。また、GII では、日本語版と BP 版の結果の比較により、N4 にとっては「タ形」は母語では不自然であるが、場面によって日本語ではほぼ「テイル」と同じように自然であり、N4 レベルの段階では「結果残存のテイル」は難しい項目であるが、N3 以降は「結果残存のテイル」を徐々に理解していくと考えられる。

GIII と IV に関しては、予備調査の結果により、動詞によって「テイル」か「ある・いる」の使用傾向があった。しかし、学習者は「テイル」の使い方がわからないという原因で「ある・いる」にしたのか、「テイル」より「ある・いる」の方が自然だと思ったのかは、はっきり確認できなかったが、本調査では以下の図で分かるようにそれが確認できた。

以下の図 3~6 は本調査における BPS の日本語版と BP 版、そして NS の回答、それぞれの全問題の平均の結果を示したものである。図の縦軸は 4 段階のリッカート尺度の平均値を示している。

図 3 は BPS の日本語版と NS の回答、それぞれの GIII の全問題の平均を示したものである。2 要因分散分析（混合計画）を行った結果、交互作用が有意であった ($F(16, 1996)=8.49, p<.01$)。そこで、レベル別に S の単純主効果を検定したところ、N1~N4、NS では 1%水準で有意だった。S 別にレベルの単純主効果を検定したところ、全ての S が 1%水準で有意だった ($S1 : F(4, 499)=6.12, S2 : F(4, 499)=5.16, S3 : F(4, 499)=6.37, S4 : F(4, 499)=12.73, S5 : F(4, 499)=3.75$ 共に、 $p<.01$)。Bonferroni 法を用いた多重比較の結果、以下のような

った (表 2)。図 4 は BP 版の全問題の平均を示したものである。1 要因分散分析を行った結果、S 間の差が有意であった ($F(4, 380)=67.67, p<.01$)³。

³ Bonferroni 法を用いた多重比較によって、S1、3、4 の平均は S2 と 5 よりも有意に大きい (MSe = 1.1329、 $p<.05$)。

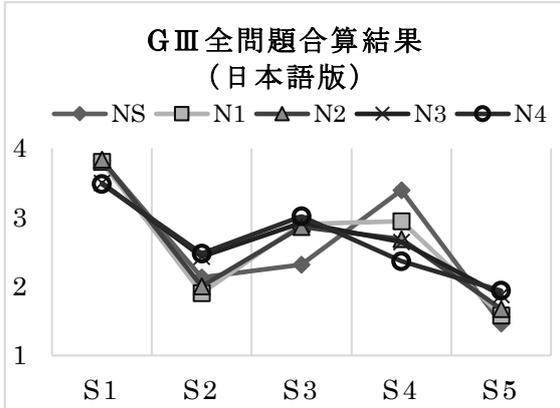


図3 - GIII全問題合算の平均

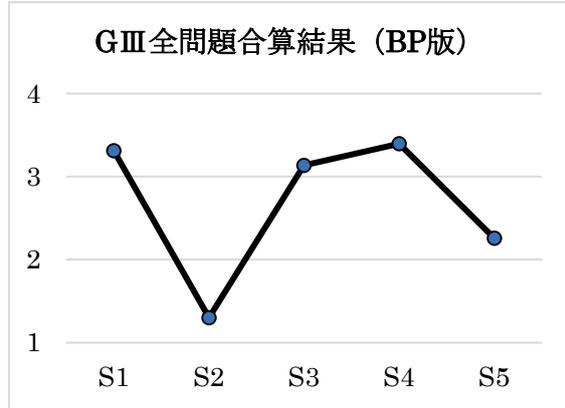


図4 - GIII全問題合算の平均 BP版

表2 - GIIIの多重比較の結果

形態別の5つの問い	レベルの平均間の差	MSe
S1 (テイル)	NS、N1、N2>N3、N4	0.5159、 $p<.05$
S2 (テアル)	N3、N4>N1、N2	1.2217、 $p<.05$
S3 (タ)	N1、N2、N3、N4>NS	1.1646、 $p<.05$
S4 (ある)	NS、N1>N2、N3、N4	1.1205、 $p<.05$
S5 (テイルNがある)	N3、N4>NS	0.9936、 $p<.05$

図5はBPSの日本語版とNSの回答、それぞれのGIVの全問題の平均を示したものである。2要因分散分析(混合計画)を行った結果、交互作用が有意であった($F(16, 1996)=7.33, p<.01$)。そこで、レベル別にSの単純主効果を検定したところ、N1~N4、NSでは1%水準で有意だった。図6はBP版の全問題の平均を示したものである。1要因分散分析を行った結果、S間の差が有意であった($F(4, 380)=100.42, p<.01$)⁴。

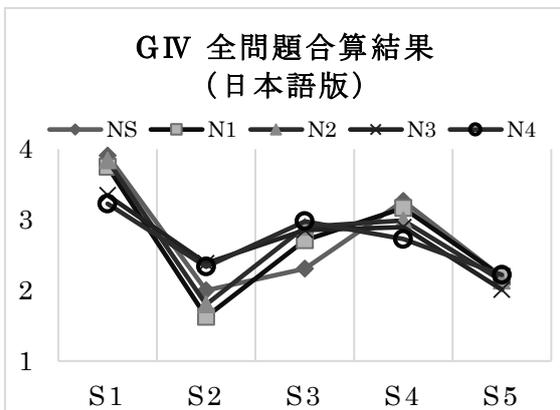


図5 - GIV全問題合算の平均

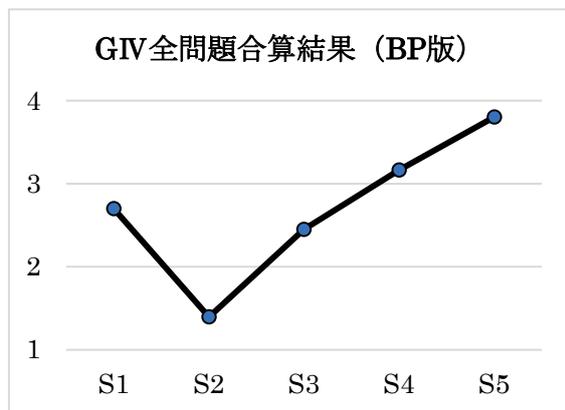


図6 - GIV全問題合算の平均 BP版

⁴ Bonferroni法を用いた多重比較によると、S1、3、4、5の平均はS2より有意に大きく、S4、5の平均はS1より有意に大きく、S5の平均はS4より有意に大きい(MSe=0.7640、 $p<.05$)

日本語版の S 別にレベルの単純主効果を検定したところ、S1~4 が 1%水準で有意だった (S1 : F(4, 499)= 14.43、S2 : F(4, 499)= 9.53、S3 : F(4, 499)= 5.74、S4 : F(4, 499)= 4.03 共に $p<.01$)。S5 では有意ではなかった。Bonferroni 法を用いた多重比較の結果、以下のようになった (表 3)。

表 3 - GIVの多重比較の結果

形態別の 5 つの問い	レベルの平均間の差	MSe
S1 (テイル)	NS、 N1、 N2>N3、 N4	0.6259、 $p<.05$
S2 (テアル)	N3、 N4> N2	1.0999、 $p<.05$
S3 (タ)	N2、 N3、 N4> NS	1.1772、 $p<.05$
S4 (ある)	NS>N4	1.0976、 $p<.05$

これらの結果から全体的に BPS にも NS にも GIII と IV で提示された場面では「テイル」が最も自然であることがわかった。それは BP でも自然であり、両言語は対応しているからこそ、学習者には自然であることが推測できる。NS、N1、N2 にとっては「ある」もやや自然であり、N3 と N4 にとっては「タ形」は「ある」と共にやや自然であることが分かった。しかし、GIII に関しては、N1 と N2 は S3 「タ」以外は正しく判断している (ただし、N2 は「ある」は NS と判断が異なる) が、「タ」に関しては、N1、N2 も正しく判断できていないことが分かった。その面では GIV の結果は GIII と似ているような傾向が見られる。

このことから全問題の結果からは「タ」に関してはレベルを問わず判断できない場面がある。

表 4 - GIII・IV各問題の S3 (タ形) と S4 (ある) の平均

動詞	G	S	NS (n=30)		N1 (n=18)		N2 (n=20)		N3 (n=26)		N4 (n=32)	
			Mean	SD								
落ちる	GIII	S3	2.30	1.16	3.44	0.83	3.60	0.73	3.50	0.80	3.47	0.71
		S4	3.77	0.56	3.33	0.75	2.80	0.98	2.77	1.05	2.44	1.22
	GIV	S3	2.23	1.17	2.50	1.17	2.85	1.06	2.88	0.93	3.28	0.91
		S4	3.47	0.72	2.78	1.08	2.70	1.10	2.58	1.01	2.28	1.18
集まる	GIII	S3	2.83	1.13	3.44	0.60	3.50	0.59	3.35	0.78	3.16	0.83
		S4	3.07	1.09	3.11	0.81	3.10	1.04	3.15	0.86	2.75	0.87
	GIV	S3	1.73	1.00	2.44	1.26	2.95	0.80	2.96	1.13	2.84	0.91
		S4	3.23	0.99	3.11	0.87	2.60	0.97	2.69	0.95	2.25	1.09
止まる	GIII	S3	1.97	1.08	2.39	1.06	2.35	1.11	2.77	1.05	3.00	1.03
		S4	3.73	0.44	3.06	1.03	2.80	1.17	2.73	1.19	1.84	0.97
	GIV	S3	2.37	1.28	2.89	1.10	3.00	0.84	2.73	1.19	3.13	0.89
		S4	3.57	0.92	3.44	0.76	3.40	0.73	3.08	0.96	3.13	0.93
空く	GIII	S3	2.17	0.97	2.33	1.05	2.00	1.10	2.08	1.03	2.44	0.97
		S4	3.00	1.06	2.28	1.10	2.05	1.20	1.92	0.78	2.44	1.09
	GIV	S3	2.90	1.19	3.00	1.00	2.80	0.93	2.85	1.03	2.66	1.02
		S4	2.80	1.17	3.33	1.11	3.25	0.70	3.23	1.01	3.25	1.06

しかし、表 4 で分かるように問題別から見るとどの動詞がその傾向があるのか明らかにならなかったと思われる。問題別の結果からは予備調査と異なった傾向が見られた。

「落ちる」の場合、予備調査ではGIIIとIVでは冠詞を問わず「ある」の使用が多かった。本調査では、「テイル」が最も自然で、その次にどのグループでもNSと上のレベルでは「ある」が自然である。しかし、GIII（定冠詞）ではレベルを問わず「タ形」の使用は自然で、GIV（不定冠詞）では、N3とN4だけについて、「タ形」が自然である。BP版では、定冠詞がつく文では、「タ形」と「ある」が自然で、不定冠詞がつく文では「テイル N がある」（たとえば、「開いている窓がある」と「ある」が自然という結果であった。要するに、BPで「落ちる」に関しては定冠詞がつく文であれば、誰の物なのか分かるため、出来事を報告するか（タ形）、その物の位置（存在している場所 - ある）を指す。一方、不定冠詞がつく文であれば、誰の物なのか分からないため、いつ、どのようにその物が落ちたのか分からないため、物に対する存在感が強く感じられ、「テイル N がある」か、または「ある」の使用が一番適切となる。日本語版の結果から、N1とN2、そしてNSにも「落ちる」に対する感覚は「存在」の意味が強いということが明らかになった。ただし、定冠詞と不定冠詞の結果の間には差があった。要するに、BPSにとっては定冠詞がつく文ではBPでも日本語でも「タ形」の使用が自然という結果はBPによる「定冠詞」の使用の影響だと考えられる。一方、N3とN4にとって、どの場面でも「タ形」と「ある」の使用が自然という結果が見られた。母語の「タ形」の使用が影響を与えていると同時に、定冠詞と不定冠詞の結果の間には差がなかったため、N3とN4にとっては「テイル」に関しては「動作の継続」の感覚が強く、「結果残存」と関連しないことも考えられる。

「集まる」の場合は予備調査では「テイル」の使用の割合が圧倒的に高かったが、本調査ではどの場面でも「テイル」の使用が最も自然であることが分かった。BP版の回答でも「テイル」の使用は自然であり、両言語が対応しているため、想定していた結果である。しかし、「ある」、「タ形」「テイル N がある」の使用に関しては、定冠詞と不定冠詞のそれぞれの結果に異なる傾向が見られた。定冠詞の場面では、「落ちる」の結果と同じように、N1～N4には「タ形」の使用が自然ということが分かった。不定冠詞の場合では、N1とN2には「いる」が自然であり、N3とN4には「タ形」の方が自然である。つまり、「落ちる」の結果と同じように、全レベルで冠詞に対する感覚の影響が見られた。その上、「集まる」の場合でもN3とN4の結果から「結果残存のテイル」はまだ定着していないということが分かった。加えて、BP版の結果では冠詞によって結果が変わり、「不定冠詞」の場合は存在の感覚がさらに強くなることが明らかになった。

「止まる」の場合は予備調査では定冠詞がつく場面では「ある」の使用が多かった。本調査では、冠詞を問わず、どの場面でも「テイル」と「ある」はほぼ同じように自然である。ただし、定冠詞の場合は、N4には動詞のタ形も自然という結果が見られた。また、NSには不定冠詞の場面における「止まる」に限り他動詞「止める」を使い「止めてある」の使用も自然であることが分かった。要するに、NSには「テアル」の使用は「車が止めてある」という場面は誰かの意図で、または何かの理由で車がそこに止まっていること自体が一つ

の存在として解釈できるであろう。BPS には「落ちる」や「集まる」と似たような傾向が見られたが、「タ形」に関しては「止まる」の場合、N3 では使用が見られなかった。この結果により、「止まる」は他より定着しており、BPS にとって分かりやすいと思われる。

最後に「空く」の場面は、予備調査ではどの場面でも「テイル」の使用の割合が圧倒的に高かった。しかし、本調査ではグループによって結果が分かれた。いずれのグループでも「テイル」が最も自然であるが、GIII では NS には「ある」も自然で、BPS には不自然であるという結果が見られた。一方 GIV では BPS にも「ある」は自然ということが分かった。場面から考えると（「座りたい席が空いている」という場面）、BPS にとって定冠詞の場面では、いつも座りたい席はその日に空いており、存在より、空いているかどうかの状態の感覚が強いと思われる。また、状態を描写する文には定冠詞に「ter」は用いにくいためそれが日本語に影響すると言える。

(7)? Tem o seu lugar vago.

ある 定冠詞 あなたの 席 empty-PT

それに対して、不定冠詞の場面（「バスの席が空いている」という場面）では、バスの席は、いつも狙っている席ではなく、ただの空いている席の存在であるため、「ある」の使用が自然ということになると思われる。また、BP 版の結果から、定冠詞の場面では「テイル」が自然で、不定冠詞の場面では「テイル N がある」、つまり、存在を表す文が自然であることが明らかになり、母語の語感から考えると冠詞によって「空く」に関しては、BPS は日本語でも状態を表すときと存在を表すときを区別していると思われる。

GIII と IV の結果では「テイル」に対する判断には差はなかった。それは両言語が対応しているからだと思われる。しかし、「ある」と「タ形」の使用に関する結果に差があり、BP における冠詞の語感の影響だと考えられる。しかし、他のグループの確認もあったため、冠詞の厳密な影響を証明するには、このグループの場面数が少なかったと思われる。その一方で、それぞれの BP 版から分かるように冠詞の使用によって場面に対しての感覚が変わり、そのことが影響を及ぼさなかったとは言い切れないであろう。つまり、BPS は場面によって、母語の語感の影響で「変化の結果の持続」よりも「存在」の感覚が強くなることが考えられる。また、本調査の結果から NS にとっても場面によって「ある」の使用は「テイル」と同じで、「結果残存のテイル」と存在を表す「ある・いる」は動詞によって類義表現として用いることができるということが明らかになった。

6. まとめと今後の課題

以上、本稿では BPS の「結果残存のテイル」の使用傾向を明らかにし、母語の影響による習得上の問題を考察した。日本語で「結果残存のテイル」と BP の「estar+過去分詞」が基本的に対応するため「結果残存」は相対的に習得が困難ではないが、冠詞の使用による違いが見られた。このことから、BP における冠詞の知識を活かせば「結果残存のテイル」

の習得がより容易になると思われる。小山(2004)で指摘されているように、学習者の母語を誤用の原因にするのではなく、母語が「いつ」「どのような」影響を与えるのか理論化することが必要である。学習者の語感を活かし、日本語教育において着目すべき点をさらに探る必要があると考える。また、李(2007)が述べたように「結果残存」の習得に関しては「かたまり」で覚える表現があり、その表現に限って他の用法よりも正用率が高い。本研究の予備調査の結果から「集まる」「空く」の使用傾向の結果により、BPSにはいわゆる「かたまり」で覚える表現もあるのではないかと思われるため、今後検討が必要である。

また、中国語と現象として重なるところを比較するため、中国語話者にも調査を行う必要があると思われる。さらに、調査でのNSの結果から場面によって「テアル」と「テイルNがある」に関する感覚はBPSの冠詞に関する感覚と共通している点があるのではないかと考えられる。その共通点が実際に存在するかどうかさらに調査を行い、今後検討したい。

参考文献

- 庵功雄(2010)「第1回 アスペクトをめぐって」中国語話者のための日本語教育研究会編『中国語話者のための日本語教育研究』創刊号, 41-48.
- 庵功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘(2000)『初級を教えるための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク.
- 稲垣俊史(2010)「中国語話者による日本語の移動表現の習得について—英語話者と比較して—」中国語話者のための日本語教育研究会編『中国語話者のための日本語教育研究』創刊号, 28-40.
- 稲垣俊史(2013)「テイル形の二面性と中国語話者によるテイルの習得への示唆」中国語話者のための日本語教育研究会編『中国語話者のための日本語教育研究』4, 29-41.
- 彌永史郎(2011)『新版ポルトガル語四週間』大学書林.
- 儀保ルシーラ悦子(2014)「ブラジル・ポルトガル語のアスペクト・テンス体系—日本語のアスペクト・テンス体系との比較研究」『ロマンス語研究』47, 1-10.
- 黒野敦子(1995)「初級日本語学習者における「テイル」の習得について」『日本語教育』87, 153-164.
- 小山悟(2004)「日本語のテンス・アスペクトの習得における普遍性と個別性—母語の役割と影響を中心に—」小山悟・大友可能子・野原美和子編『言語と教育—日本語を対象として』、くろしお出版, 415-436.
- 陳昭心(2009)「「ある／いる」の「類義表現」としての「結果の状態のテイル」」『世界の日本語教育』19, 1-15.
- 李明華(2007)「シテイルの習得要因に関する一考察」『早稲田大学日本語教育研究』10, 83-92.

(ジュリア トッフオリ 言語社会研究科博士課程)